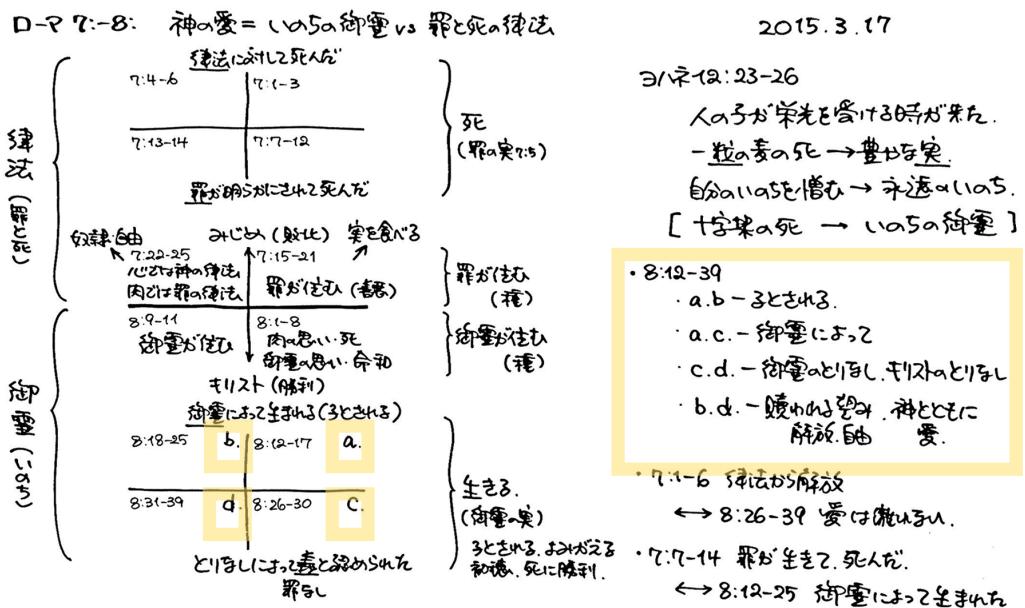




## ローマ人への手紙の構造 7章～8章



ローマ人への手紙7章から8章を分析しています。

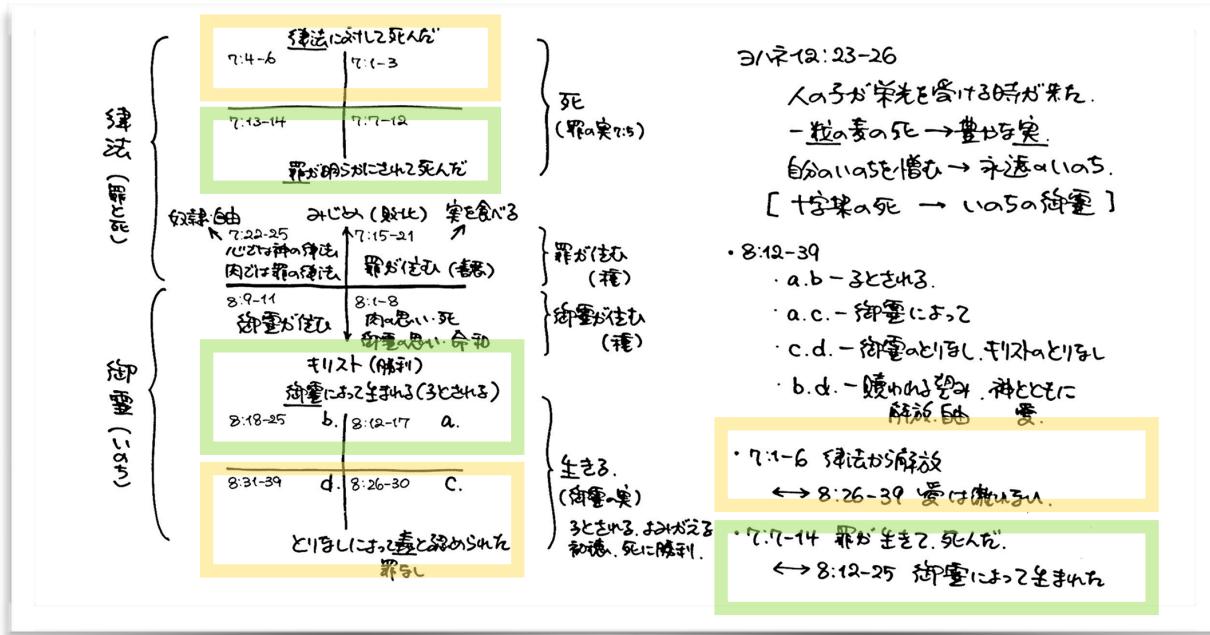
8章12節～39節がひとつのまとまりです。いのちの御靈の教えのところです。そこにabcdと段落をつけました。8:12～17がa、8:18～25がb、8:26～30がc、8:31～39がdです。

この平行を見て、aとb前半のところは、子とされること。子としてくださる御靈を受ける。子なので贖われることを待ち望んでいる。それは被造物もということ言っているところです。

aとcは、御靈によってということが強調されています。

cとd後半は、御靈のとりなしとキリストのとりなし。とりなしと言われているところがここに書かれています。

次がbとd。aとcは御靈によってということでしたけれども、それに対してbとdは、贖われる望み、解放される、自由になるということに対して、dは、神様は絶対に見放しませんということ。愛・義の奴隸になったということ、神様は必ず共にいますということが平行しているところだろうということです。



7章の1節から14節までの罪と死の律法のところとも平行を考えています。

aとb、8:12～8:25までのところは、御靈によって生まれる、子どもとされるということでした。7章の最初の後半7:7～14は、罪が生きて死にました。御靈によって生まれることと罪によって死ぬということが、御靈が住んでいることに対して生まれる、罪が住んでいることに対して死ぬというのが平行しているところです。

7:1～6は律法に対して死にました。8:26～39は、愛は離れないということを言っていますので、律法から解き放される。律法に対して死んで解放されることと義の奴隸とされる、愛はキリストの愛から離されることはないということが平行しているのではないかということで、まだ分析中です。